地方都市の美術館設立に関する報告

— 室蘭市民美術館の事例 —

REPORTS OF ART MUSEUM ESTABLISHMENT IN LOCAL CITY

— A case study of Muroran museum of Art —

真境名達哉 — *1   三橋純予 — *2

キーワード:
市立美術館, 室蘭市, 市民協働, 美術館設立

Keywords:
Municipal Art museums, Muroran city, Citizens cooperative business, Establishment of Art museum

Tatsuya MAJIKINA — *1   Sumiyo MITSUHASHI — *2

Many of municipal Art museums have painful finance now. Muroran museum of Art was established in October, 2008 by the citizens and it has been managed by themselves, too. Muroran museum of Art will show a good reference in other municipal museums. Because we were related to establishment, we will report the establishment process. As a result of investigations, the following features are reported.
1) In Muroran City, there were two museums related citizens cooperative business.
2) The civic group that established the museum has long history of activity of establishment.
3) We proposed designs that citizens easily stay in museum. Moreover, the museum has the overall plan for the future.
4) After the establishment, the museum makes many good activities in Muroran city.

1. はじめに

1990年以降のバブル経済破綻後、地方自治体の財政悪化とともに、公立美術館は運営予算の削減が相次ぎ、その存在意義が問われるようになった。特に都道府県に比べ財政的規模の小さい市立レベルの美術館では、美術館の建設の是非が市長選の争点となる^{*1}など、存在そのものが問われている。しかし社会教育の役割、美術作品の保存、調査研究等を担う美術館の重要性は疑うべくもなく、財政規模の小ささを理由に、地方都市の美術館設立を否定すべきではない。もちろん圧迫された財政状況に対し、潤沢な予算を前提とした美術館設立には無理があるため、地方都市の身の丈にあった設立が必要であろう。

本報では、2008年10月に市民の力により開館し、以後、公設公営ではあるが市民協働として運営されている「室蘭市民美術館」の事例を報告する。1990年代以降、全国の多くの美術館が教育事業の強化と共にボランティア育成など市民の参画も積極的に取り組むようになったが、本報での市民協働とは市民が美術館の運営全般にまで関わるものを指す。国内の美術館では事例は少ない^{*2}が、市民に大きく開いたこれら美術館は、教育の場の広がりだけではなく、地域文化の掘り起こし^{*3}や運営費の削減という点でも、特に地方の市立レベルの美術館においては重要な条件と考える。

ここでは地方都市の美術館のあり方に関し、特に建築計画の点で議論の契機となることを狙い、その実践に加え設立背景などを調査し報告するものである。本論ではまず、室蘭市の他の博物館関連施設の調査より、室蘭市の文化行政の背景を捉える。また、美術館設立運動を通して、市民協働の主体者となる運営組織の属性を捉える。

また、筆者らは室蘭市民美術館の開館1年前から計画作成の機会を得たため、運営者となる市民らの要望を踏まえた建築の計画を示す。最後に、開館後の運営実態を捉えながら、地方都市における美術館設立の意義を述べる。

2. 室蘭市の文化行政

2.1 室蘭市の概要

本報の対象施設がある室蘭市は胆振支庁の支庁所在地で、1907年の製鋼所創立からはじまる重厚長大型の産業を持つ「鉄のまち」として知られている。1975年頃以降、構造不況・円高不況などで大きな経済的な打撃を受け、それに伴い人口も1970年の16万人を最大に、2009年現在は9万5千人まで減っているが、バブル経済の影響を大きくは受けていない^{*4}。現在(2005年)も産業別市総生産のおよそ8割は工業が占めており(製造品出荷額8064億円)、鉄鋼をはじめ一般機械などを生産する工業都市である。

2.2 室蘭市の博物館関連施設

(1) 室蘭市港の文学館

室蘭市の博物館関連施設は、室蘭市港の文学館(以下文学館と略す)、室蘭市青少年科学館、室蘭市民美術館、市立室蘭水族館、室蘭市民民族資料館の5つある。現在、前三者の施設で市民協働による運営が行なわれており、1988年設立の文学館は、室蘭市におけるその最初の事例となる。

文学館の初代館長による^{*5}と、文学館の設置活動は、ある巡回展をきっかけに地元の文学資料の収集が全く行われていない現状に、地元の文学サークルが危機感を募らせたことによる。1979年に「室

^{*1} 室蘭工業大学くらし環境系領域 講師・博士(工学)
(〒050-8585 室蘭市水元町27-1)

^{*2} 北海道教育大学芸術課程 准教授・修士(教育学)

^{*1} Lecturer, College of Environmental Technology, Muroran Institute of Technology, Dr. Eng.

^{*2} Assoc. Prof., Dept. of Fine Art and Music, Hokkaido Univ. of Education, M. Edu.

蘭文学館の会」を発足させ、資料収集を活発に行うようになった。什器などは活動の結果において必要となるものを低予算で求めるスタイルで活動を続けたため、その後の文学館設立活動では当時の市長をはじめ多くの市会議員の賛同を得たようである。最終的には11年の活動成果が実り、1988年に市の遊休施設を利用し文学館が開館した。開館当初も陳列ケースの大半はデパート什器のリサイクルという低予算ぶりであったという。初代館長は「室蘭文学館の会」の会長がそのまま就任するという、後の室蘭市民美術館と同じスタイルで就任した。現在も文学館は、公設公営でありながらボランティアスタッフ主体で運営されており、また200名もの会員を持つ「室蘭文学館の会」の活動拠点ともなっている。

(2) 室蘭市青少年科学館

室蘭市青少年科学館（以下科学館と略す）の特徴は、活発な活動を行う市民協働の有料施設である。科学館の開館（1963年）は文学館より早く、1975年に最高となる12万人の来館を記録した後、1998年には2万5千人と減少した。2005年に指定管理者制度を導入、その後入館者数を4万人に増やした実績は2005年のNHK「クローズアップ現代」で紹介されている。科学館では中学高校の退職した理科の先生が30名ほどでNPOを結成し、指定管理者として運営に当たっている。館内の催しは、年間140回以上の実験・演示^{*6}を手作りなどで経費を掛けずに行っており、特に低学年の児童が親と弁当持参で長時間滞在するなど、現在も賑わいを見せている。

指定管理者制度導入の成功例と目されているが、導入以前から当時は現役先生であったNPOメンバーがボランティアとして関わっており、日頃温めていたアイデアを指定管理者制度導入後に実行したことが人気を呼んだようである。ヒアリングによる^{*7}と、これらボランティアの先生と教育委員会の関係は1963年の開館にまで遡り、当初よりスタッフ不足分を現役の理科の先生に大きく委ねていた。彼らに対する教育委員会の信頼は現在も大変厚く、科学館を文学館同様に美術館運営の目標事例として挙げていた。

上写真) 室蘭市港の文学館
右写真) 室蘭市青少年科学館

写真1 室蘭市の市民協働の博物館関連施設

3. 美術館設置までの経緯

3.1 3つの設立活動

室蘭市民美術館の設立活動を調べる^{*8}と、その時期により主に3つにまとめることができる（図1）。最初の活動は、道立美術館分館^{*9}の誘致の活動である。1979年、道南地域^{*10}に北海道立美術館の分館設置が決定すると、函館市と室蘭市がそれに名乗りを挙げ、1980年に「道美術館誘致期成会」を結成している。全市を挙げて道知事らへ陳情などを行うが、1984年に函館に決定したため、この会はそ

の年に解散している。

二番目の活動は、1988年に発足された「室蘭美術館設立期成会」により行われたもので、室蘭に独自の美術館を設置することを目的とした活動である。具体的には、歴史的建造物である室蘭旧駅舎を再活用した美術館建設を目指す活動であったが、2000年に旧駅舎が国の登録有形文化財に指定され、多目的ホールとして利用されることが決定し、「室蘭美術館設立期成会」は解散している。

三番目の活動は、「室蘭美術館設立期成会」解散を機に、組織を改組し作られた「室蘭市に美術館をつくる市民の会（以下「つくる会」と略す）」によるものである。「つくる会」は当初、道立規模の美術館の設立を目指したが、後に市民ギャラリーの活用を目指す活動に目標を変えている。「つくる会」の特徴は2つある。まずは会の代表者が、市民美術家団体の会員であり、絵画、写真、書道、陶芸の分野など市の芸術分野をおおよそ網羅している点である。2点目は、市民美術家以外の市民が多く属している点である。「つくる会」は美術館設立の賛同者を募り、常時1000人を越える会員で組織されている。その会長（現美術館館長）も地元商店街の元店主で、市民美術家ではない。「つくる会」は、先の美術館設立期成会が特定の市民美術団体中心の活動だったことを反省し、当初からより多くの市民を加えることを重視しており、市民らに向け年間で7回ほど市民講座や鑑賞会、児童向けの写生大会などを開催する活動を行っていた。

図1 美術館設立までの活動

3.2 建築における動き

前節でみた3つの活動に対し、室蘭市民美術館の開館までにいくつかの施設設置などの動きが見られる。まず市が1995年に市民ギャラリー（196㎡）と収蔵庫（69㎡）を設置している。当時は「室蘭美術館設立期成会」による設立活動の時期で、これらの施設の設置に至る経緯などの詳しい記録を把握することができなかったが、当時の関係者へのヒアリングによる^{*11}と、これまでの美術館設置活動への対応であり、一方では市が所有する美術作品の劣悪な保存環境への対応でもあった。1994年に文化センターの管理棟地下の廃業となったレストラン店舗を購入し、市民ギャラリーと収蔵庫を設置している。しかしこれは後に見るように、「つくる会」にはあまり評判が良くなかった。

もう一点留意すべきは、市民側も「つくる会」の活動期にある2007年の初めに、美術館活動の前段階として「サロン」と呼ばれる小規模ギャラリーを室蘭市中央町のアーケード内に開設し、展示運営を

1年間行っている。サロンでは主に、先の絵画、写真、書道、陶芸の市民美術団体による展覧会が行われた(図2)。元々店舗だった空間を「つくる会」のメンバーが手作りで改装し、1階店舗の奥側には「つくる会」のメンバーが常時駐在していた。1ヶ月に2〜3回の展覧会が行われ、暗いアーケードの中、サロンにいつも光を灯し活動を続けた。最終的にはほぼ1年に渡り27回と多くの展覧会が催されたが、それらの展示作業を通し、「つくる会」のメンバーが少しずつ学芸員業務を習得していったといえる。また、サロンの運営は市民協働の運営という点でも、行政へ実績を示す良い活動となった。

サロンの運営開始に合わせる形で、室蘭市も2006年12月に文化センターの地階にある2つの空き店舗(旧写真館と旧ブライダル館、計:171㎡)を購入し、2007年度の美術館設置の議会承認へ向けて動き出している。これらの店舗は先にみた既設の市民ギャラリーと収蔵庫の隣にあり、相乗的な活用では申し分ないこと、また室蘭市文化センターは音楽ホールや会議室など他の文化施設も文化センターは有しているなど有利な点が多かったことが、その選定理由と思われる。

図2 サロンの様子

4. 市民美術館への要望と建築の計画

4.1 建築への要望

「つくる会」と行政の仲介者として改修案の提案が求められた筆者の一人は2007年2月〜2008年4月までの間、両者を交えた打合せに30回程度参加することができた。ここでは、建築計画の与条件として両者の建築への要望を見ていきたい(図3)。

(1) 「つくる会」の要望

「つくる会」の要望は、室蘭市の美術「拠点(図3の項目11)」の創出を望んでいた。それは美術展示の拠点であり、それには自らの発表の場という意味も含まれている。また同時にそれは無料展示など市民が「気軽(項目12)」に立ち寄れる場所であること、そして室蘭市の美術に対して「活性化(項目13)」を与えてくれる場所であることが要望された。例えば、若い美術家、若い鑑賞者が多く集まる場である。また建築そのものに関しては、外観として「シン

ボル(項目14)」的であること、また内部空間では市民ギャラリーの展示用照明などを例に「展示環境の充実(項目15)」を求められた。同様に市民ギャラリーを例に無窓であることを「暗い」と述べていた。また大理石模様の塩ビ床シートなどについても「陰気な感じがする」「美術館らしくない」などの声が上がリ、爽やかでありながらも「美術館らしい空間(項目16)」が求められた。

(2) 教育委員会の要望

教育委員会としては、根本的には先にみた文学館や科学館のような「生涯学習の場(項目21)」となることを求めている。あくまでもそれは「市民を活性化する場(項目22)」であり、観光的要素を入れて欲しいなどの話はなかった。充実した生涯学習の場となるためには、「つくる会」の「活動の充実(項目23)」も期待していた。また、当然ながら建設の「低コスト(項目24)」の要求もあった。

(3) その他の留意点

以上に加え、本件は改修であるため「ゾーニング(項目31)」「動線の整理(項目32)」などを行う必要があった。また将来における「美術館全体像(項目33)」を示す必要もあると考えた。後に見るように予算が十分でない場合であっても、美術館の全体像を持つことで、それを完成させるという目標を持ちながら活動できると考えた。よってここでは既設の駐車場などの「外部空間(項目34)」にも目を向け、考えうる可能性を計画に盛り込むべきと考えた。

図3 建築計画の与条件

4.2 建築の計画

建築計画において、一般に面積設定では多くの葛藤を生むが、本計画においては、美術館が計画されていた文化センターの上階が業務の移転で空きスペースが生じる可能性^{*12}があったため、厳しい面積選定は行われなかった。当初、これに関しては、上階への外階段の設置案も出たが、かつての美術館誘致活動のように過大となることが危惧され、明確な増床案は示さないものとした。

また収蔵庫に関しても、既設収蔵庫は市の所蔵品^{*13}で手狭な状況であったが、本計画において、収蔵庫を拡張することは見送られた。これも先のように、拡張に関しては上階利用の可能性があるので、早急に計画に盛り込む必要がないと判断されたためである^{*14}。

よって、建築計画は主にホールと、ワークショップスペースそして外部空間を中心に行った。これらの計画に際しては、既設の市民ギャラリーへの市と「つくる会」の評価なども考える上で参考とした。市民ギャラリーの使用日数は平成15、16、17年度でそれぞれ79、65、92日と決して多くなく、市から見ると、折角の設置にも関わらず使用が少ないことで、「つくる会」の運営を不安視している所があった。しかし「つくる会」側では、意にそぐわない使いづらい施設を与えられた印象を持っていた。おそらく「つくる会」の要望を十分に聞かずに設置したことに問題があったと思われる。これか

らも提案する計画は、まず運営者側の要望を大きく踏まえるべきであり、例えば、活発な利用を促すには、展示保護だけに留意するのではなく、彼らの要望する気軽なアクセスを積極的に考えることなども提案した。

図4の左図は改修前の建築の状況であり、右図は先の建築への要望を踏まえた計画案であり、下記は領域毎に計画の要点をまとめたものである。「つくる会」らへは、これらが容易に理解できるようにイメージ図などを作成した（図5）。

(1) 開放的なホールの設置

「1. ホールとして、平面に一体感（以下、数字は図4の右図と対応）」が出るよう部屋が細切れになることを避け、「3. 明確な動線」となるよう設けた。このホールは市民美術館の中心的な空間であるため「8. 無料スペース」とし、出入りが容易となることで「2. 多くの交流が起こる」ことが期待される空間となる。ホールの内法は4.5M程度あるので、壁面に市民の絵画展示しながら、動線や小さな談話スペースが確保できる。また「9. 美術館らしいインテリア」も併せて考える。

(2) ワークショップ室の確保

「4. ワークショップ室の設置」は、生涯学習施設としての機能を担う空間であり、本館の重要な室となる。これらの室の賑わいは、ホールだけでなく、外部へ表出することで、市民らの関心を喚起することが望まれる。例えば、見通しを妨げない建具（窓など）、あるいは壁を少し傾けることで、「5. ワークショップ室の様子」を表出させる仕掛けが必要である。

(3) 外部空間

対象地は5.5M～6.5M程の奥行き駐車場を持つが、わずかな外部空間も美術館を豊かにする可能性がある。ここでは駐車場は別途に設けられたため、周りの外部空間には身障用スロープや搬入用駐

図5 美術館のイメージ図

車場などの最低限必要なスペースを設け、それ以外は街の憩いの場となるように「6. 植栽やベンチ」の設置や「7. 屋外展示」を計画した。主入口とワークショップ空間は、外部から内部に関心が向くように2M程庇を張り出す意匠とした。特に「つくる会」からの外観の「シンボル」という要望へは、美術館正面の視認性を上げるよう主入口の意匠と、建物上部に1M×3M程のフラッグを外周に掲げるなどの、コスト的にも簡易な仕組みを提案した。

5. 室蘭市民美術館開館の実際

5.1 開館

2007 年 12 月、室蘭市議会において設置条例が承認され、併せて運営の方針が示された。それに合わせ建築も基本計画から実施設計

への見直しが行われた。正式な設置委員会がないため、教育委員会から市の予算へ盛り込む形で提案されたが、当初の計画案は市の想定する予算を大幅に超えていることが分かった。2007年度の教育行政方針等に美術館設立が謳われていた^{*15}ため、設立こそ見送られることは無かったが、少ない予算での改修費で行われることになった。道立美術館誘致運動から知る「つくる会」メンバーにはあまりにも縮小された予算であったため、設立をやめようとの声も一部上がったが、教育委員会から「今後の活動の盛り上がりには、随時施設等の拡充を」などの申し出もあり、これらの予算での設計を室蘭市に託した。これらは、あくまでも非公式なものであり、将来もその実効を保証できるものではない。しかし、道立美術館誘致活動から30年もの付き合いを共にする両者の信頼関係故に、これらはなんとか受け入れられた。

いずれにせよ、建築に関しては計画案を大幅に縮小する実施設計となった(図6)。主入口の庇など新設部分そして外構の計画も全て取りやめとなり、空き店舗を仕切っていた内部壁が全て取り除かれ、将来のホールとなる一体的な展示スペースのみが実現された。ホールに面する大開口は、将来の主入口となる計画を残す意味でも、安

図6 最終的な設計案

上写真) 美術館入口部の外観
右写真) ギャラリー兼ホールの内観

写真2 室蘭市民美術館

易な新規更新を止め、既存のサッシをそのまま残した(写真2)。

2008年10月1日に室蘭市民美術館が開館した。開館記念式は市長や館長らの挨拶という極めてシンプルなもので、開館記念展では室蘭ゆかりの作家展が行われた。また初代の館長は、港の文学館同様、これまで設立活動に大きく関わった「つくる会」会長が就任することになった。

開館と同時に「つくる会」は発展的に解消し、会長以外全ての組織と会員を引き継ぐ形で「室蘭市民美術館をささえる会(以下「ささえる会」と略す)」が発足している。この会は2009年の会員数は1034名で、企画部会、運営部会、収蔵部会などをもち、会員は無償ボランティアとして展示会の搬入、搬出を手伝う他、年会費や基金パザーなどから一部費用を持ち出す^{*16}など、常設展や特別展に加え、その他の企画展においても企画の提案から運営まで美術館全般の活動を支えている^{*17}。

5.2 開館後の運営状況

最後に、開館から1年3ヶ月過ぎた現在の美術館の状況を展示活動、教育活動、そして建築利用をみる。まず1年3ヶ月(2008年10月1日～2010年1月17日)の展示状況は表1となった。企画展は16回で、内容は室蘭ゆかりの作家展が14回と多く占めている。室蘭市の所蔵品を展示する常設展は18回、地元作家を中心とした公募展、グループ展などを含めた個展の開催数は26回と最も多くなっている。個展は使用料が必要となるが、「つくる会」の要望により、既存ギャラリーに比べ使用料は安い設定^{*18}となっている。開催日数では常設展が360日と最も長い、一日あたりの来客数は企画展、個展がそれぞれ92人/日と多い。またこれも「つくる会」の要望などで入館を無料となったが、その影響もあり2010年1月28日に入館者数が総計3万人を超えるなど、小規模美術館としてはまずまずの入館者数で、市民の気軽な立ち寄り場となっていることが分かる。

表1 開館からの実績数

	開催数	開催日数(日)	来客数(人)	1日の客(人/日)
企画展	16	187	17214	92
常設展	18	360	21032	58
個展	26	148	13543	92
合計	60	695	51789	(全体平均)75

注1) 上記は2007.10.1～2009.1.17までの展示開催の内訳

注2) 展示は一部、2つ並行で行われている

美術館の開館は活発な展示だけでなく、教育などの活動も生み出している。現在(2010年1月)までに室蘭市内の幼稚園、小学校、中学校がそれぞれ4校、授業の一環などで来館している。また、筆者の一人が属する北海道教育大学岩見沢校の卒業制作展を開催する(2009年2月24日～3月8日)など、大学との協働事業も行っており、今後は市内の高校とも協働で事業が企画されている。

美術館開館後は、「つくる会」の最も大きな要望であった学芸員の設置も実現されている^{*19}。月1回程度の常設展、年1、2回程度の特別展の開催予定においても、これまで「ささえる会」に大きく押される形での運営が多かったが、開館1年が経ち、市側でも年次の大きな展示方針を立てるなど、徐々にあるが学芸員を擁する美術館らしい活動も見られるようになった。また、道内他都市の美術館関係者など市を超えた学芸員の交流も始まっている。

最後に、開館後の建築利用に際しての不具合を館長に尋ねた。特

に通りに面した大開口は白塗りの壁、床を持つホールにより一種の光ダクトとなって拡散光が奥まで入る効果を持つが、これらも含め、現時点ではギャラリー中心の使用であり、大きな問題はないようである。市所蔵の水彩画やデッサンなどに関しては、開口近くの展示に気遣うようだが、個展出展者からは「自然光のある展示は良い」などの評価が聞かれる他、他の市立美術館職員からも「開放的で良い」「今後改修の参考にしたい」などの声もあり、むしろ評判は良いようである。

6. まとめ

以上は下記の4つにまとめることができる。

- 1) 美術館設立の背景には市民協働の仕組みがあり、設立以前から室蘭市にはそのような運営の博物館関連施設による経験があった。
- 2) 現在の美術館の運営組織は30年もの活動実績を持ち、それらの経験を踏まえ徐々に行政からも信頼される組織となった。
- 3) 改修計画は、市民が気軽に立ち寄れるなど、運営者の意向を大きく踏まえている。また、美術館として将来に向けての全体像を持ち、今後の活動状況に合わせて整備することを目指している。
- 4) 開館後の運営状況をみると、展覧会や教育などの活発な活動と市内外への交流の広がりが見られた。

現在はギャラリー主体の美術館となっているが、美術家や愛好家を中心とする市民協働の美術館においては、それが建築的特徴であるかもしれない。また、県立規模などの美術館と比べると、見劣りする美術館であるが、開館後の活動とその広がりをみると、地方にとっては、小さいながらも美術館という機関が存在する意義は大きいことが分かる。今後は、美術館設立以上に大変な美術館運営の充実を第一に考えながら、建築の整備も図っていくことになるだろう。

室蘭市では開館後1年間の運営実績を鑑みて、早速、収蔵庫拡張の計画も出ているようである。小規模ながらも活動状況や新たなサービスに対応しその姿を変えていく、そのような地方都市ならではのユニークな仕組みを持つ美術館となることを望んでいる。

注釈

- * 1: 横須賀美術館の建設をめぐる、2005年の横須賀市長選などがある。公立美術館は、民意によってその設立の是非を議論するのは当然であるが、一方で現在の美術館はいわゆる贅沢な「ハコモノ」として消極的に取り上げられているきらいがある。
- * 2: ミュージアム・ボランティアよりさらに踏み込み企画・運営を行っている公設公営による滋賀県立琵琶湖博物館の事例が、文1pp80-82により紹介されている。
- * 3: 例えば文2などで、地域文化の掘り起こしについては、市民参加の有効性が大きく謳われている。また、地域文化の掘り起こしが地域振興・活性化につながることをより強く実践するものとして、文3などにあるエコミュージアムなどの活動も注目されている。
- * 4: 文4のpp19-20によると、工業指数からみた分析において、バブル崩壊後全国・道内が明らかに低下したのに対し、室蘭は安定した増加を示していたと分析されている。
- * 5: 2009年11月17日、24日に電話にて初代文学館館長（現在退職）にヒアリングを行った。
- * 6: その他にも、年間を通じてのロボット工作（約40回）や4～6年生毎に科学クラブ（約40回）など、多数の活動を行っている。
- * 7: 2009年11月10日、現科学館の館長（14代館長、2005～現在）および12代館長（2000～2004、現在も科学館の嘱託職員）にヒアリングを行った。また、来館者数などの把握は文5、文6を用いた。

- * 8: 設立活動の調査は、「室蘭市に美術館をつくる市民の会」から借用した文7から文12までを資料として用いた。
- * 9: 北海道は広大なため、北海道立美術館は分館方式をとっている。1978年札幌に近代美術館設置後、1982年旭川、1986年函館、1991年帯広、1998年釧路の順に分館が開館している。
- * 10: 一般には北海道の南部の渡島、檜山、胆振、日高の支庁を指す。
- * 11: 当時の教育委員会および市建築課の市民ギャラリーの担当者の2人へ、設置経緯についてのヒアリングを電話にて行った（2010年1月）。
- * 12: 予想されていたように、上階にあった教育委員会などは美術館開館後2009年に他施設へ移転した。
- * 13: 2010年現在、油画、日本画、木彫、書、写真やデッサンなども併せて、330点ほどある。
- * 14: 既設の収蔵庫は杉板の内壁、ナラの床材でW2300*H2270のスライドラックを15枚持つが、既に手狭であった。教育委員会もそれを懸念し、「つくる会」との話し合いから開館までのわずかな期間に、市立施設のホール30ヶ所程度に100号以上の絵画を常設的な展示場所を設け、手狭への対応を試みている。教育委員会の迅速な対応も、「収蔵庫の問題は今後も考えてくれる」という信頼に繋がったと思われる。
- * 15: 文15などで、市民に知らされた。
- * 16: 「つくる会」「ささえる会」は個人年会費1000円を集め運営されている。
- * 17: 人員は館長の他、受付事務として1人配置されている。後に学芸員がこれに加わるが、現時点では美術館に専属従事していない（2010年1月）。また、公設公営であるため光熱費などは市が負担している。その他、特別展では作品の運送費、印刷代、受付などの一部人件費を市が経費負担していた。なお、2010年1月の調査では、収蔵部会については現在においてまだ十分に機能していなかった。
- * 18: 既設の市民ギャラリーの使用料は1日7590円（196㎡）に対し、新設のギャラリー部は2カ所に分け、1カ所は1日夏期717円（55㎡）冬期1435円と低い利用料に設定されている。
- * 19: 文17の新聞記事に、現学芸員は1991年より室蘭市職員で現在、教育委員会に所属、4年掛けて学芸員資格を修得したところ、美術館が開館し、2009年6月から担当学芸員に任命されている、と紹介されている。

参考文献

- 文1) 上山信一、稲葉郁子:『ミュージアムが都市を再生する』、日本経済新聞社、2004年
- 文2) 伊藤寿朗:『ひらけ、博物館』、岩波書店、1991年
- 文3) 大原一興:『エコミュージアムへの旅』、鹿島出版会、2003年
- 文4) 室蘭商工会議所発行:室蘭工業振興ビジョン 企業家あふれる工業集積都市室蘭を目指して、2000年
- 文5) 室蘭市青少年科学館発行:平成20年度版、室蘭市青少年科学館年報、2009年
- 文6) 北海道青少年科学館連絡協議会発行:25年のあゆみ、1988年
- 文7) 室蘭に美術館をつくる市民の会:室蘭に美術館をつくる市民の会趣意書、2000年
- 文8) 室蘭に美術館をつくる市民の会:室蘭に美術館をつくる市民の会会則、2000年
- 文9) 室蘭に美術館をつくる市民の会:室蘭市文化センターギャラリー運営計画、2005年
- 文10) 室蘭に美術館をつくる市民の会:室蘭市美術館（仮称）運営委員会設置要綱、2006年8月
- 文11) 室蘭に美術館をつくる市民の会:室蘭美術館（仮称）平成19年度ならびに平成20年度事業計画について、2007年
- 文12) 室蘭に美術館をつくる市民の会:室蘭美術館（仮称）運営計画（案）、2007年
- 文13) 室蘭市教育委員会:室蘭市社会教育振興計画、1997年
- 文14) 室蘭市教育委員会:室蘭市社会教育振興計画（平成20年度～平成29年度）、2008年
- 文15) 室蘭市総務部市民対話課:広報むろらん7月No916号、2007年
- 文16) 室蘭市史編纂委員会編集:「新室蘭市史第三巻」、室蘭市役所、1985年
- 文17) 北海道新聞（室蘭版）:土曜と一く 室蘭市民美術館の学芸員 企画や展示 市民と協力、2010年2月5日
- 文18) 室蘭市教育委員会発行:「室蘭市所蔵作品図録」、2006年

[2010年2月18日原稿受理 2010年5月10日採用決定]